

「してはならない」から 「やりたい」ことを支援する人権教育へ

森 実（大阪教育大学助教授）

人権教育のポイントは、大きく変わりつつあります。その変化はさまざまに表すことができるでしょう。ここでは、「してはならない」とする人権教育から、「やりたい」ことを支援する、あるいは問題解決を支援する人権教育への変化として書き進めます。

●「してはならない」とする人権教育

「してはならない」とする人権教育は、人権の規範的側面を表しています。これは、「差別してはいけません」という言い方に代表されます。差別によって悔しい思いをしている人がいるかぎり、このような側面をなくすことはできません。

しかし、この側面ばかりになると、いくつかの問題が出てきます。まず、言われている側にとって内発的な感情になりにくいということです。自分の中に接点となる体験や信念がないかぎり、それは外から自分に課せられる責務にとどまります。

また、「差別してはいけません」という言い方は、ちょっとソフトになると「〇〇の人たちに優しくしましょう」という言い方にずれ込んでいきます。これは、差別問題を、社会全体の仕組みから変えていくというよりも、自分たちの心がけだけでなんとかできるかのような錯覚につながります。

さらに悪くすると、「〇〇してはいけません」という規範が数多くかぶさってくることによって、誠実な

人が自分の思いを見失いかねないという問題が出てきます。

●「〇〇したい」ことを支援する人権教育

一方、「〇〇したい」ことを支援する人権教育、問題解決を支援する人権教育は、人権の対人援助的側面を表しています。問題に直面している当事者が、その解決に至れるように、さまざまに手助けすることを基本に据えた人権教育です。日本で弱かったのは、こちらの側面ではないでしょうか。

●結婚差別をテーマとする人権学習について

支援する人権教育とは、たとえば好きどうしなのにまわりの反対にあってつきあうことを阻まれかけている人たちが、その状況を変えていき、本人たちが望むなら結婚することに結びつくように応援するような教育です。そのために、結婚や結婚差別をテーマとする学習に必要なのはどのようなことでしょうか。調査結果などを参考にすると、次のような柱が考えられます。

- ① 恋愛や結婚における差別を素材に、現代社会の差別や偏見について学ぶ。（一般的啓発）
- ② 恋愛や結婚における差別が破談などにいたる急所を明らかにし、それにどう対処すればよいかを学ぶ。（予防・介入）
- ③ 結婚後に出会うかもしれない困難な状況をどう乗り越えるかについて考える。（フォローアップ）
- ④ 被害側当事者のケアや救済、加害側当事者の学習や支援などを進めるための学習。（ケア・救済）
- ⑤ 結婚という制度そのものを問い、家族のあり方などを考える学習。（社会分析）
- ⑥ 結婚差別を支えている社会のしくみを変えるような市民運動を広げることにつながる学習。（市民運動）

たとえば、②の「急所」とは、座敷牢のようなところに閉じこめられて長く会えない状態にされないようにする、身近に相談できる人を見つける、などです。こうした「急所」について調査結果などを手がかりとして整理し、それにどう立ち向かえばよいのかを考



えるような学習を組むのです。そんな学習は、同和問題に限らず、本人同士が望む結婚を阻むさまざまな要因について同じように役立つことでしょう。

結婚差別に関する従来の学習は、「こんなに悔しい思いをしている人がいます」ということを訴えてきました。それを乗り越えてきた人の生き方を学ぶ学習もありました。現在も結婚差別にあっている人がいることを考えると、このような訴え方は不可欠です。ここで提案しているのは、それをさらに押し進めようとすることです。

●セルフエスティームという概念と人権教育

このような枠組み変化に大きく関わっているのが、セルフエスティーム(自尊感情)※用語解説参照 という概念です。最近の人権教育論は、自分を根源的なところで肯定できる人が他者の存在についても肯定しやすい、という考え方を土台に置いています。言い換えれば、自分のやりたいことを分かっていて、それを実現するために動いている人の方が、他の人のそういう願いや行動にも思いをはせやすいということ

です。だから、教育の基本も、「○○したい」という思いの自覚とその実現を支援することになるのです。

このような変化は、さまざまな領域で進みつつあります。この変化は、啓発の主体が行政から市民グループや市民団体へと移りつつあることとも深く関わっています。いわば、市民が主人公となった啓発や人権への取り組みが、人権教育の新しい地平を切りひらいているのです。

用語解説

【セルフエスティーム】

自尊感情または自己肯定感情ともいう。「自分がかげがえのない大事な存在だ」という気持ちのことで、自分を否定するのではなく、肯定的に認め、自分らしさに自信を持ち、自分を価値のあるものとして思えるようになること。自分が大切にされた経験がなければ、他人のことを大切にすることが難しいと言われている。